

106 誌上発表 歴代漢方処方集の比較検討(第1報)大津 幸恵, 小曾戸 洋, 渡辺 浩二, 野澤 隆幸
星野 卓之, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

私達は臨床の場で漢方診療を行うにあたり、日々、処方集を手もとに置き、それを参考に方剤を選択している。製薬会社の処方手帳であったり、大塚・矢数の処方集であったり、各診療機関で独自に作成された処方集であったり、中医学系の処方集であったり、さまざまな場合があるにせよ、もとをただせば、種々の中国医学古典から良方を選びすぎり、加減し、経験方を交えたものにほかならない。

用いる処方集によって、処方の決定は大いに左右される。薬味や分量の異なる場合もある。私達が使っている処方集は過去のいかなる医方書に由来するのか。過去どのような処方集が存在し、今日の処方集に反映されているのか。これを遡及調査することは、現代の処方集の根拠を確認し、錯語を正し、さらに新しい選択肢を広げるうえで大きな意義をもつものと考えられる。

今回は当該研究の端緒として、日本江戸時代の代表的処方集である『観聚方要補』文政版1819年・安政版1857年『勿誤薬室方函』浅田宗伯1877年『古今方彙』1747年『衆方規矩』曲直瀬道三1636年『家伝預薬集』甲賀通元1671年『梧竹楼方函口訣』百々漢陰19世紀『養寿院方函』山脇東洋18世紀『究理堂備用方府』小石元瑞1829年『和田泰庵方函』和田東郭18世紀『方苑』平岡水走1811年『方極』吉益東洞1764年『古方區別』1772年『類聚方』吉益東洞1764年『奇正方』賀古公山1831年『薬方選(医療薬方規矩)』加藤謙斎1780年を資料に採り、年代を追い、処方の分類法、病門の立項法、収録処方数、収録処方の傾向、編集の主眼・特徴などについて調査・検討を行った。『観聚方要補』は文政版・安政版ともに74の病門に分類している。文政版は2,399方、安政版は2,380方を収録する。収録処方は漢～清の中国処方によっており、とくに、『千金要方』『太平聖恵方』『金匱要略』『外科正宗』を出典とする処方が多い。このような病門別に分類した処方集は『古今方彙』『衆方規矩』『梧竹楼方函口訣』『養寿院方函』『究理堂備用方府』『和田泰庵方函』があった。『類聚方』は桂枝湯、桂枝加桂湯、桂枝加芍薬湯……といった構成薬別に分類し、113処方を収録する。このような構成薬別に分類した処方集は『方極』『奇正方』『家伝預薬集』があった。『勿誤薬室方函』はいろは順に処方を配列、847方を収録する。本朝経験方が多用されている。いろは順分類の処方集はほかに『方苑』『古方區別』『薬方選』があった。

これらのことから、江戸期に成立した代表的処方集の分類は大きく「病門別」「構成薬別」「いろは別」になることが明らかとなった。病門別の分類は病名や症候群によって分類されるものが多いが、適応処方群別ともいべき分類もあり、詳細に検討すると従来さまざまな処方分類が試みられていることがわかった。

今後さらに調査対象の書を増やし、日本の薬剤処方集の淵源と発展経緯について研究を進めたいと考えている。